

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520371

研究課題名（和文） 状態再帰と与格受動—ドイツ語ヴォイス体系の解明を目指して

研究課題名（英文） “Zustandsreflexiv” and “recipient-passive” – Toward an explication of the voice system in German

研究代表者

大矢 俊明 (OYA TOSHIAKI)

筑波大学・大学院人文社会科学部・教授

研究者番号：60213881

研究成果の概要（和文）：ドイツ語には再帰動詞の過去分詞とコピュラにより形成される「状態再帰」と呼ばれる構文と、与格項を主語化する「与格受動」と呼ばれる構文がある。前者については、再帰動詞に課せられる意味的制約を明らかにし、さらにその過去分詞はいわゆる状態受動と同様に形容詞化されていることを示した。また、後者は統語的受動文ではなく、談話の流れにおける要請を満たすために与格名詞句を主語ないしトピックとして実現するための構文であることを実証した。

研究成果の概要（英文）：This research is concerned with the two constructions in German, i.e. “Zustandsreflexiv” (= state of reflexive) and “Bekommen-Passiv” (= passive of recipient). It is pointed out that the “Zustandsreflexiv” can be formed from two types of reflexive verbs and that the perfect participle in this construction is adjectivized, just like in the adjective passive. Furthermore, it is argued that the “Bekommen-Passiv” is not a syntactic passive, but a special construction in which the recipient argument is established as a topic in discourse.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総 計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：状態再帰、与格受動、bekommen 受動、ドイツ語、ヴォイス

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 伝統的なドイツ語文法(cf. Helbig & Buscha 2001)では、再帰動詞の過去分詞と sein 動詞から形成される「状態再帰」(Zustandsreflexiv)と呼ばれる構文(ex. Er ist erkältet/vorbereitet. 彼は風邪をひいている／準備している)の存在が指摘されており、この構文は現代ドイツ語のヴォイス体系において独立した文法カテゴリーを形成すると主張する研究も存在する(cf. Buscha 1991)。この

構文は、過去分詞と sein 動詞から構成されるという点で、いわゆる状態受動(Zustandspassiv)に類似しているが、この状態受動については近年、意味上の主語、すなわち外項の抑制を伴う統語的な受動文ではないと主張されている(cf. Rapp 1998, Kratzer 2000, Maienborn 2007)。すると、状態再帰についても、その形成原理を再吟味し、状態受動との共通点ならびに相違点を明らかにすることにより、あわせてドイツ語という個別

言語が持つヴォイス体系を見直すことができるはずである。

(2) また、与格項を主語化した「与格受動」ないし「bekommen 受動」と呼ばれる構文(ex. *Er bekommt das Buch geschenkt*. 彼は本を贈られた)をめぐっては外項の抑制を伴う統語的受動文であるか(cf. Reis 1985), あるいは外項の抑制を伴わない構文であるか(cf. Haider 1986)について議論されてきたが、この構文についても近年の与格に関する統語的研究(cf. McIntyre 2006, Schäfer 2008)をふまえて改めて分析することにより、やはりドイツ語におけるヴォイス体系の全体像に迫ることができると予測される。

## 2. 研究の目的

(1) 「状態再帰」については、どのような再帰動詞から状態再帰が形成できるのかという経験的な問題、ならびに Helbig & Buscha (2001)では、状態再帰(ex. *Er ist erkältet*. 彼は風邪をひいている)は対応する再帰構文(ex. *Er hat sich erkältet*.)における「主語」を叙述するとされているが、なぜそれが可能であるのか、という理論的問題について明らかにする。

(2) 「与格受動」については、werden 受動とは異なり、統語的な受動文ではなく、与格名詞句を談話におけるトピックとして実現するための構文であることを示す。さらに、*Er bekommt/kriegt das Auto gestohlen*.(彼は車を盗まれた)のように bekommen/kriegen が「受け取る」という文字通りの意味を失い、したがって既に助動詞化しているという指摘(cf. Wegener 1985)に対しても明確な回答を与える。さらに与格受動が統語的な受動文ではないことを明らかにすることにより、ドイツ語の与格は統語的には全く不活性であり、すべての統語操作に関与できないことを示す。

## 3. 研究の方法

状態再帰については先行研究が少ないため、まず具体的な言語データの抽出が必要であった。そのために、CD-ROM 化された辞書(Duden - Deutsches Universalwörterbuch)に掲載されている再帰動詞をすべて抜き出し、インターネットによる例文検索、ならびにドイツ語話者に対するアンケート調査を行うことにより、状態再帰が可能である再帰動詞をリストアップした。その上で状態再帰が可能となるための意味的条件に関する仮説を構築し、さらにその吟味のために再びドイツ語話者に情報提供を依頼した。さらにオランダ語との比較対照も行った。オランダ語においては、ドイツ語と異なり、「風邪をひく」「休息をとる」という出来事を再帰動詞によって表現されない。このことから、なぜドイツ語の「風邪をひく」「休息をとる」を意味する再帰動詞 *sich erkälten/erholen* から状態再帰を

形成できるかについて、体系的な説明が可能となることが予測される。また、与格受動については先行研究を吟味しつつ、ドイツ語の新聞コーパスを分析することにより、与格受動における主語が持つ談話上の特徴をさぐった。さらにオランダ語における類似の構文(semi-passief)との比較対照を行い、仮説を裏付けた。オランダ語においてはドイツ語と異なり、「～から...を盗む」を表現する際に「～から」を与格ないし間接目的語により表示できない。このことから、なぜドイツ語において「彼は車を盗まれた」という出来事を与格受動により表現できるのかについて、体系的な説明が可能となることが予測される。

## 4. 研究成果

(1) 状態再帰については次の研究成果を得た。

① 状態再帰は *sich waschen/schminken/informieren/vorbereiten* などのような ‘actions which one generally performs upon one’s self’ (Haiman 1983)をあらわす *introverted verb*, あるいは *sich erkälten/erholen/verlieben* などのような内在的再帰動詞から形成される。前者の再帰代名詞は意味役割を持ち、後者の再帰代名詞はいわゆる反使役化(*anticausativization*)をもたらしものである。すなわち、*Er hat sich erkältet/erholt/verliebt*.における主語は意味上の目的語に対応する。すると、状態再帰においては、常に意味上の目的語に対して叙述が行われていることになる。

② *informieren/beschäftigen* などの動詞が *waschen/schminken* などと同様に ‘*introverted verb*’であるという点は、Haspelmath (2005)の指摘にしたがい、日常的な直感を離れ、目的語に「再帰代名詞」と「人称代名詞」を選択する用法の頻度をコーパスから調査することにより明らかになる。例えば、*Ich informiere mich*.(自分で調べる)などのように再帰代名詞を目的語に持つケースは、*Ich informiere ihn*.(彼に知らせる)のような人称代名詞を目的語に持つケースのおよそ6倍になる。

③ 状態再帰に生起する過去分詞は形容詞化されている。そのことは、接頭辞 *un-*の付加(*Er ist noch ungewaschen*)、形容詞と過去分詞の並列(*Er ist [müde und erkältet]*)、過去分詞から比較級が形成できること(*Er ist noch erkälteter als ich*)などから示される。

④ *Sie sind befreundet/verfeindet/verlobt*.のようにいくつかの相互動詞からも状態再帰が形成できるが、これらの動詞も *introverted verb* と分析できる。すなわち、*sich befreunden/verfeinden/verloben* における再帰代名詞は意味役割を持つ。このことは、この場合の再帰代名詞はいわゆる「相互代名詞」として用いられているわけではないことを示している。

⑤ *Er ist erkältet*.(彼は風邪をひいている)は、*sich erkälten* という内在的再帰動詞そのもの

から形成されているように見えるが、このように考えた場合は、状態再帰の形成には *sich* を消去するという操作が必要になる。しかし、文法にそのような余剰な操作が備わっているとは考えにくい。ため、*Er ist erkältet.* は *sich erkälten* という再帰動詞そのものではなく、その根底にあると想定される *verkält-* のような「目に見えない」統語単位から形成されると分析する必要がある。

⑥ ①③⑤を統合すると、状態再帰は再帰動詞そのものではなく、その根底にある *v-* という抽象的単位の（形容詞化された）過去分詞が意味上の目的語（＝内項）を叙述していることになる。この点で、状態再帰はいわゆる状態受動と何ら変わらない。つまり、状態再帰も状態受動も共に形容詞化された過去分詞が直接目的語ないし内項を叙述する構文であり、両者を少なくとも統語的に区別する必然性は存在しない。さらにこの分析は *die Tür ist geöffnet.*（ドアが開いている）のような典型的な状態受動にも実は状態再帰の解釈が許されることを予測するが、この予測は正しい。すなわち、*die Tür ist geöffnet.* は、「ドアが開けられた結果にある」という状態受動の解釈以外にも、「ドアが開いた結果にある」という状態再帰の解釈も持つ。

(2) 与格受動については、次の研究成果を得た。

① 「統語的な受動文」と「受動の解釈」は厳密に区別されなければならない。例えば *Er bekam eine Kugel in den Arm.*（彼は腕に弾を受けた）のような *bekommen* と前置詞句を用いた文は *Er bekam eine Kugel in den Arm geschossen.* のように与格受動にパラフレーズできることから、「受動の解釈」そのものは *bekommen* と前置詞句を用いた文にも認められることになる。受動の解釈は、さらに英語の *have* や *get*、フランス語の *faire* を用いた構文にも認められる。ドイツ語の与格受動もこのような通言語的な観点から考察する必要がある。

② 与格受動は、Haider (2010) が主張するように *bekommen/kriegen* の項構造と動詞の過去分詞の項構造を合成することにより形成される構文である。すなわち与格受動における *bekommen/kriegen* は「受け取る」というもともとの意味を保持しており、*werden* 受動における *werden* のように助動詞化しているわけではない。この主張は、与格受動では対格の虚辞 *es* の生起が許されない（\**Er hat es von ihr angetan bekommen*）、与格が生起する多くのイディオムから与格受動を形成できない（\**Sein Herz bekam Luft gemacht < seinem Herzen Luft machen*）といった事実から裏付けられる。

③ 与格受動は統語的な受動であると主張する既存の研究では、*Er bekommt/kriegt das Auto gestohlen.*（彼は車を盗まれた）のように

*bekommen/kriegen* が「受け取る」という文字通りの意味を失っている場合があり、したがっては既に助動詞化しているという指摘がみられる（cf. Wegner 1985）。しかし、この場合の *bekommen/kriegen* は「事物」ではなく、「出来事」を受け取ると分析される。この分析は、そもそもドイツ語の与格が、英語やオランダ語の間接目的語と異なり、*Er öffnete der Frau die Tür.*（彼はその女性にドアを開けてあげた）における *der Frau*（その女性）のように「窓が開けられる」という「出来事」の受け取り手（recipient）を表示できることと平行的である。

④ 与格受動は、「受け取り手」を談話におけるトピックとして表示するための構文である。この主張は、*werden* 受動と比較すると、与格受動の主語が人称代名詞により実現しているケースが多いこと（ex. *Zwar haben sie die Möglichkeit angeboten bekommen.* 確かに彼らはその可能性を提供されたが...）、等位接続詞 *und* に後続する文で多く用いられること（ex. *Ich habe ... eine offizielle Anfrage gestellt und ... einen Fragebogen zugeschickt bekommen* 私が公式に照会してみると、質問用紙が送られてきた）、*wer* により導かれる関係文と共に用いられることが多い（ex. *Wer seine Telefonrechnung nicht bezahlt, bekommt die Leitung gekappt.* 電話代を払わない人は回線を切られる）といった事実から裏付けられる。

⑤ 与格受動が統語的な受動文ではないとすると、ドイツ語の与格は統語的には全く不活性であり、したがってあらゆる統語操作に関与できないことになる。これにより、ドイツ語の中間構文には与格が生起可能であること（ex. *Das Buch verkauft sich den Studenten gut.* この本は大学生によく売れる）に対しても説明が与えられる。ここでは直接目的語（*das Buch*）が与格目的語を飛び越えて主語化されており、生成文法で指摘される局所性（locality）に違反しているとされているからである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① Oya, Toshiaki, Syntaktisches Passiv und passive Interpretation - Im Fall des Rezipientenpassiv, *Neue Beiträge zur Germanistik*, 査読有, 140 巻, 2010, 10-25.

② Oya, Toshiaki, Das Zustandsreflexiv - eine adjektivische Konstruktion, *Zeitschrift für Germanistische Linguistik*, 査読有, vol. 38, 2010, 203-223.

③ Oya, Toshiaki, Three Types of Reflexive Verbs in German, *Linguistics*, 査読有, vol. 48,

2010, 227-257.

④ Oya, Toshiaki, Ground Arguments in German Particle Verbs, *Journal of Germanic Linguistics*, 査読有, vol. 21, 2009, 257-296.

⑤ 大矢俊明, \*pour the glass in vs. das Glas eingießen, 文藝言語研究 言語篇, 査読有, 54 巻, 2008, 45-64.

〔学会発表〕(計 3 件)

① 大矢俊明, いわゆる状態再帰の形成原理, 日本独文学会, 2010.5.29. 慶応義塾大学日吉キャンパス

② 大矢俊明, 不変化詞動詞における Ground Promotion —ドイツ語との対照—, 日本英文学会, 2009.5.31. 東京大学駒場

③ 大矢俊明, 再帰動詞の項構造 — A Germanic point of view, 日本フランス語学会 談話会, 2008. 11.22. 京大会館

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

大矢 俊明 (OYA TOSHIAKI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：60213881